



北海道空知郡上砂川町におけるスポーツ活動について：三井砂川鉱業所における運動会を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 大塚, 美栄子, 滝波, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004051

北海道空知郡上砂川町におけるスポーツ活動について
— 三井砂川鉱業所における運動会を中心に —

大塚 美栄子・滝波 武*

070 北海道旭川市 北海道教育大学旭川分校保健体育教室

*060 北海道札幌市 北海道教育大学名誉教授

Sports Activities in Kamisunagawa, Hokkaido
— Athletic Meets at Mitsui Sunagawa Mining Station —

Mieko OTSUKA and Takeshi TAKINAMI*

Physical Education Laboratory, Asahikawa College.

Hokkaido University of Education, Asahikawa 070

*Sapporo 060

Abstract

Sports activities in Kamisunagawa, Sorachigun, Hokkaido, are centered around the MITSUI Sunagawa Mine.

The history of these activities, particularly the athletic meets at the mine, can be divided into five stages:

1. 1st to 6th meeting (1922-1927). The early stage. General events and representative discipline events in inter-shop matches. (This period is unrecorded, as it occurred before the publication of "SUNAGAWA".)
2. 7th to 16th meeting (1928-1937). The active period. The athletic meetings became the largest annual event of the Friendship Society and were successfully held with the participation of the whole mine.
3. 17th to 22nd meeting (1938-1945). The war period. The Friendship Society was reorganized as the Industrial Patriots Society. The athletic meetings became a training meetings and became related to war skills. Activities were suspended during 1944, and 1945.
4. 23rd to 34th meeting (1946-1958). The postwar rehabilitation period. Lively and colorful athletic meetings continued for the 12 years, involving the whole mine.
5. 1st to 8th meeting (1969-1976). The meetings restarted as an inter-town recreation

activity after a 10-year suspension.

Among sports activities at MITSUI Sunagawa Mining station, the athletic meetings provided amusement for both miners and staff. It was supported and continuously organized by the enterprise, which emphasized its role as a means of personnel management and accomplishing cooperation between labor and management.

I はじめに

北海道空知郡上砂川町における「三井砂川鉱業所」を中心としたスポーツ的活動について、同鉱業所親和会機関紙「すな川」¹⁾を主資料とした調査に基づき、そこにおける活動の実際、社会的、地域的特徴について検討したので報告する。

あらためて述べるまでもなく、かつて石炭産業は、北海道における基幹的な産業であった。「三井砂川鉱業所」の経営者である「三井」は、炭鉱の他、さまざまな企業体を持つ戦前の大財閥である。三井は、大日本体育協会の依頼に応じて、オリンピック選手派遣への寄付もしくは貸与を承諾した会社²⁾でもあった。この会社が、北海道の炭鉱において、鉱夫・職員のスポーツ・運動活動について、いかなる方策を採用したのであろうか。北海道におけるスポーツに関しては、北海道帝国大学等の学生スポーツや青年団の地区対抗競技については、一般的に知られている。では北海道の企業におけるスポーツ活動の実態は如何なるものであったであろうか。本論はこのような疑問により、三井砂川鉱業所から発行された「すな川」、「すな川新聞」等のコピーを読む機会が与えられたことから、ここでのスポーツ活動について考察を試みることにしたのである。

なお、本報告においては、三井砂川鉱業所親和会における多くのスポーツ行事のうち、運動会を中心として考察する。この運動会を取り上げるのは、三井砂川鉱業所における最も大きな年中行事の一つとして位置づけられ、独特の内容によって継続して行われていたという理由による。また、第二次大戦後は、親和会ではなく、会社、労働組合、職員組合三者によって運営されているので、その組織の資料も合わせて考察すべきであるが、本調査においては、それらの資料にあたるができなかった。

三井砂川鉱業所のスポーツ活動は、とくに、ベルリンオリンピックにおいて、社員・田島直人が三段跳で優勝したことでよく知られる。陸上競技をはじめ、スキー、野球等の運動部、修養部活動等の全体的状況については、稿を改めて報告したい。

II 上砂川町の概要

上砂川町は、かつては石炭の町であり、とくに三井鉱業所一社と一体の町であった。上砂川町の概要について、主として『上砂川町史』³⁾及び『新上砂川町史』⁴⁾によって、その概略を述べる。上砂川は北海道空知支庁管内のほぼ中央に位置し、周囲は歌志内、砂川、奈井江、芦別の4ヶ町村に囲まれ、東部には夕張山脈が南北に走り、西方に傾斜して石狩平野に続いている。東部山脈地帯は炭層からなり、かつては夕張、美唄、奈井江、歌志内、赤平、芦別と石炭の町が並び、空知の炭鉱地帯を形成していた。上砂川は、石狩川の支流、パンケウタシナイ川に沿って細長くひらけ、当初、砂川方面に接するゆるやかなところから農地として開拓されていたが、三井鉱業所の開所によって炭鉱町として発展した。昭和34年に刊行された『上砂川町史』のはじめには、「町の面積は、43.9平方メートル、空知管内では23位という狭さであるが、人工密度は市を含めた全道市町村中

第一位であり、人口は3万5百人で空知管内第一位、全道でも豊平町に次ぐ第二位である」と述べられている。

三井砂川鉱業所は、大正3(1914)年に開所され、昭和62(1987)年、政府の第八次石炭政策により閉山撤退するまで、七十余年に及ぶ石炭産業の歴史を刻んだ。「上砂川」は、大正7年、三井の石炭輸送専用の鉄道が敷設された折、駅名となり、やがて町名となった。行政的には、砂川村、砂川町(昭和10年、砂川町字上砂川となった)の一部であった。表・1に、上砂川町の町勢等の推移を示した。昭和24年、上砂川が砂川から分町、独立した後の数年が産炭上、人口上、最盛期であった。

表・1 上砂川の町勢及び三井砂川鉱業所従業員数、出炭量の推移

年度	戸数	人口	従業員数	出炭量
大正 3(1914)			不明(人)	385(t)
〃 6(1917)			418	10,365
〃 9(1920)	3424	17119(砂川村)	1028	151,826
昭和 5(1930)	4238	22896(砂川村)	1993	647,668
〃 14(1939)	5226	27133(砂川村)	5649	1,402,374
〃 15(1940)				1,612,700(最高)
〃 19(1944)			7834(最高)	1,378,600
〃 24(1949)	5912	29204(上砂川)	6930	750,800
〃 30(1955)	5951	30376(上砂川)	4781	791,000
〃 55(1970)	3837	10790(上砂川)		
〃 58(1983)		10519(上砂川)	1212	1,163,463
〃 62(1987)	3261	8234(上砂川)	760	282,760
平成元(1989)	2865	6818(上砂川)	-	-

* 最高従業員数には学徒動員を含む

* 新上砂川町史、上砂川町要覧(1990年)より作成

三井砂川鉱閉山後の現在は、人口六千余の町になっている。旧炭鉱坑道を利用しての無重力試験施設や鶴町の工業団地への企業誘致等により地域振興に努めている。

Ⅲ 三井砂川鉱業所親和会、及び機関紙『すな川』について

三井砂川鉱業所親和会は、大正8年暮より準備され、大正9(1920)年4月に創立された。鉱業所では、開山後、友子制度による相互扶助が発足し、三井炭鉱共済会(大正4年)、上砂川尋常小学校後援会(大正7年)、衛生火防組合(大正8年)等も発足していた。親和会はこれらを含め統一した組織として設立されたのである。

このことについて、「世界戦争後思想界の変動著しいものがあったため、外来思想の防止、国民の善導ということが刺激となって、炭鉱従業者全員が自覚して意義ある結果をなす⁹⁾」ということを目的として結成されたとある。つまり、第一次世界大戦後の労働運動の高まりにより、たとえば夕張登川炭鉱などでもストライキが起こされたのに対し、労務対策、労働争議防止策として、「会

社と会員と相協力して事業の発展を図り、会員の幸福を増進する」(上砂川町史, p.172)ことを目的につくられた組織である。三井本店から補助金が出され、「画期的な労使強調路線が敷かれた」(新上砂川町史, p.238)のであった。

親和会は、昭和14年4月、産業報国三井砂川共愛組合、また昭和17年1月に三井砂川鉱業所産業報国会と改称、改組され、戦後は、それが解散して砂川炭鉱労働組合(昭和20年12月)、砂川炭鉱職員組合(昭和21年1月)が結成された。

初期の親和会組織は、総務、共済、火防衛生、教育、修養(のちに運動、福利、業務が加わる)の各部からなっていた。役員として会長、副会長、幹事、代議員(伍長の互選と会長推薦とで半数づつ約25-36名)、伍長160余名(各長屋や飯場から1名づつ選出された)であった。会長は、規約によって、鉱業所の事務主任、または次長が専任であった。「すな川」には、会の役員選挙の結果や毎月の代議員会の議題等が掲載されている。代議員会は毎月定期的に開かれ、行事や予算決算等が審議され、親和会運営の中心となっていた。

親和会は「運動会の開催、会員の共済、公園の設立、青年団、少年団、女子青年団の育成、山神社祭、小学校後援、火防衛生、納税の取扱、新生活の運動、映画等の催物、道路の新設、修養団の講習会、講演会の開催等々……全く町村議会のような仕事をしてきた」(上砂川町史, p.172)のであり、鉱員の生活にかかわる様々のことがらを取り扱っていたのである。

親和会は、機関紙「すな川」を昭和3年6月15日に創刊した。編集発行は、鉱業所労務係であった。第二次大戦後の昭和21年1月から「砂川春秋」とし、404号から引き継ぎ、1199号まで発行された。一炭鉱の親和会機関紙であるが、途中、戦争による中断も殆どなく、昭和3年から昭和62年迄、約60年の歴史を重ねた。「砂川春秋」は、三井砂川鉱業所内、砂川春秋編集部による発行となり、社内報的な性格を持つこととなった。昭和62年7月14日の最終号は、1199号であり、通算すると1290号を数えた。

IV 三井砂川鉱業所親和会の運動会について

この鉱業所における様々のスポーツ的活動の内から、最初に運動会を取り上げる理由は、最も大衆的な活動であり、戦前、戦後を通じ継続して行なわれたものであった点にある。『上砂川町史』、『新上砂川町史』共に、親和会機関紙「すな川」(すな川、すな川新聞、砂川春秋を含む、以下、すな川を用いる)を主要な資料としており、上砂川のスポーツ事始めとして、三井砂川鉱業所の運動会をあげている。親和会の組織である修養部の下に運動部が位置づけられ、陸上競技部、野球部等があったが、この運動会は総務部が担当し、会社から補助金が出されるなど、特別扱いられていたものである。運動会は、概ね六月の公休日に行われ、鉱業所の年中行事で最大の、家族を含めた全体参加のものであった。鉱業所の三大大行事として、運動会、山神社祭、盆行事があり、そのいずれにも相撲、マラソン等運動行事が織りこまれていた。

この「すな川」刊行以前のスポーツ状況に関する文書資料は少ない。

第1回運動会は、大正11(1922)年に開催され、これより第二次大戦中の昭和19、20年の中断及び戦後の昭和34(1959)から昭和43(1968)年の十年間を除き、継続して開催された。この鉱業所全体で行われた運動会は、実施時期及び実施内容等により、次の五期に分けることができよう。以下、順をおって内容、特徴を述べたい。

1. 初期、大正11(1922)年～昭和2(1927)年、第1回より第6回まで。

一般競技と職場対抗の選手競技が始められた初期的段階(「すな川」発刊前で記録の少ない

時期)。

2. 中心期, 昭和 3 (1928) 年～12 年 (1937), 第 7 回より第 16 回まで。

隆盛期。親和会の年間行事中, 最大のものとなり事業所挙げて盛大に実施された。運動部として陸上競技部が独立し対外的試合を行った時期。

3. 戦時時期, 昭和 13 (1938) 年～20 (1945) 年, 第 17 回より第 22 回まで。

戦時体制期。親和会が産業報国共愛会, 産業報国会に改組され, 昭和 17 年より運動錬成会と改称され, 戦技的種目が行なわれた時期。昭和 19, 20 年は中断された。

4. 戦後前期, 昭和 21 (1946) ～33 (1958) 年, 第 23 回より第 34 回まで。

戦後復興期。賑やかに華やかに, 事業所全体の行事として 12 年間継続された。

5. 戦後後期, 昭和 44 (1969) 年～51 (1976) 年, 第 1 回より第 8 回まで。

十年間中断した後の再開。各町内対抗の軽いレクリエーションとなった。

1. 初期, 大正 11 (1922) 年・第一回より, 昭和 2 (1927) 年・第 6 回までの運動会について

大正 11 (1922) 年, 第 1 回の運動会が行われた。

1 回から 6 回までの文書資料は少なく, どのような規模・内容で開催されたのかについての詳細は不明である。ただ, 一回目から, 大衆的な「一般種目」という運動会種目と陸上競技種目による「選手競技」とが共存していたことが, 『三井砂川陸上競技史』⁶⁾に述べられている。三井砂川鉱業所の陸上競技は全道的に優秀な成績を納めていたが, 親和会運動会がその基礎であった, とも述べられている。「第一回の親和会運動会は, 大正 11 年, 中町の新住宅地均しの場所で挙行され, 選手競技では一坑が勝ち, 二回目からは, 小学校のグラウンドで行ったが, ……二, 三回と二坑が優勝し……」(片山⁶⁾ 11 頁), 一坑対二坑の対立が激しくなったと回想されている。この運動会によって, 全山を二つに分けるような争いとなり, 坑員たちの対抗心が高まり, それが各坑の出炭量や諸成績に影響を及ぼし, 各坑の責任者等は, 坑内作業の成績よりも運動会の競技成績に気を配らなければならないような状況となり, 「当初は気違いじみた進みかたであったかも知れぬが, スポーツによって士気を昂揚し, スポーツマンシップの発揮によって作業の進展に貢献する所が多く, かくして今日の砂川鉱業所への発展の一翼となった」(片山⁶⁾ 8-10 頁)とも述べられている。この職場対抗の選手競技は, 職員, 従業員そして家族までも対立するようになり, 大正 15 年, 昭和 2 年と, 二年間は選手競技は中止され, 一般的運動会種目が行われ得点による競争は行われなかった。

当初, 運動会というものに興味を持たせようとして導入された職場対抗競技が, 最も関心の高いものとなり, 選手は冬もトラックの雪を除雪して練習したり, 見つからないように隠れてストップウォッチでタイムを計ったり, 有望な選手候補を捜して, その職場に所属させたり, 選手の登録は前年の 12 月 31 日までに済ませておくことと決められていたので, 年末迄, 優秀な選手の獲得に奔走, 苦労したこと等多くのエピソードが『三井砂川陸上競技史』上で回顧されている。

選手競技は, ながく継続されたのであるが, 昭和 3 年から, 札幌鉄道との対抗陸上競技を上砂川のグラウンドで行ったのを皮切りに, 対外試合が始められた。それまでの内部対抗が外のチームとの対抗戦となっていく, 各職場の対抗心は残っていても, やがて三井砂川鉱業所の選手としての意識がつくられていくこととなった。この『三井砂川陸上競技史』という書物の存在は, 上砂川炭鉱において, 陸上競技等スポーツが非常にさかんに行われたという事実を示している。この中で, 当時在籍の人々が, その状況をこもごも語り, 貴重な資料となっている。

7 回目の運動会が開催される年に, 「すな川」が創刊され, 以後, 毎年, 運動会関係記事が多量に掲載されることとなった。

2. 中心期、昭和3(1928)・第七回より昭和12(1937)年・第16回まで

昭和3年6月15日、すな川創刊号に、6月24日の第7回運動会開催が予告され、2号に「観衆1万と号す、盛大なる陸上大運動会」⁷⁾という見出しで、開会式等の写真が掲載された。またこの年から選手競技が復活した。瓶釣り、鯛釣りなど、いわゆる運動会種目を一般種目として行った。選手種目は、百米、二百米、四百米、八百米、千五百米、リレー競技、走高跳、走巾跳等の陸上競技種目を職場対抗として行った。順位を採点・合計し、総合得点を競った。

この期には、たとえば昭和11年に田島直人、橋川雄一(走高跳)、昭和12年に青地球磨男(中距離)等、大学の陸上競技部出身者が採用されている。田島が採用された年ベルリンオリンピックにおいて、三段跳で優勝した事は周知の通りである。陸上競技部選手の出場は制限され、記録、指導等に当たった。運動会の白熱した雰囲気も反映し、運動会特集の付録が発行され、グラビア写真等も多く、頁数も多い。

1) 運動会の概要

運動会の次第は、選手入場、国旗掲揚、国歌斉唱、優勝旗返還、選手宣誓、会長(副会長)挨拶と形ができていた。昭和11年1月に、三井砂川鉱業所、開所以来の大事故により21名の死者を出したので、黙禱を捧げている。以来、戦時中を通して、殉職、戦死を悼み、戦勝を祈願する黙禱、宮城遙拝等が組み入れられた。開会の挨拶は、鉱業所所長または親和会々長である、鉱業所次長によってなされる。挨拶には運動会の目的、特徴が表現される。運動会の「目的は、会員一般の慰安、体育の向上、修養、親睦にある」⁸⁾、「本日の運動会は、何の為にやるか……一、この鉱業所の事業を盛大にすること、一、この一万の大家族が楽しく幸福に暮らしうること」⁹⁾、「勝って誇らず負けて恨まず、砂川炭鉱一万の大家族たる会員、選手、職員、家族の方々が、愉快に朗らかに……親和し融和し、歓喜のつばに溶けあいたい……労資の心からの諒解等は、こんな純真な融和のつばから生まれるものと感じられる」¹⁰⁾などである。昭和10年に着任した次長・久留貞次郎¹¹⁾は田島直人らスポーツ選手を上砂川に赴任させるなど、スポーツ振興に力があつた。昭和11年の運動会には「運動精神は、勇往邁進、刻苦奮励、不退転の意気その他の大精神を錬磨、修養鍛練する」¹²⁾ことにあると挨拶した。彼は、運動する者の合い言葉は「運動は修養なり」であるとして、その言葉を若生ヶ原運動場の門柱に刻ませた¹²⁾。

2) 種目等について

運動会の種目について、「すな川」に記載されたものについてのみであるが、表2にまとめた新聞の取扱いには年ごとに変化があるので、全てを網羅しているとはいえないが、おおよその傾向を知ることができる。

選手種目が華やかに行われ、観衆の注目を集めたことが解る。トラック種目は百米からはじまり五千米、各種リレーの他、15回、昭和11年には高障害が加えられた。フィールド種目は、走巾跳、走高跳、三段跳等跳躍種目、それに砲丸、円盤、槍投など投種目が加わり、15回、昭和11年、棒高跳が加わった。女子の種目として、8回、昭和4年からリレー種目が入れられた。その後、百米走(昭和12年から50米)、砲丸投、走巾跳それとリレーとなった。女子の参加が少ないため、選手として家族の参加が認められた。各種目毎に記録が測定され、この運動会の記録として残され、新記録を出した選手は表彰、賞品授与等によって記念された。

総じて一般種目についての記事は少ない。この期の種目をまとめてみると、鯛釣り、盲猫、ペンギン、ダルマ落とし、大原女、提灯、親子、パン食い、拝借、俵運び等の競争、綱引、主婦リレーそれに上砂川で長く続けられた種目、車輪支え(48.5キロ)¹³⁾等である。

選手競技の組分けは、炭鉱の拡大にともなって変化し、女子もそれにならっている。当初、坑

内と坑外は別の組で競った。一部が一坑，二坑の2チーム，二部は坑外の事務，機械，電気の3チーム対抗であった。しかし11回（昭和7年）より，坑外を含め三部あるいは四部対抗となった。昭和11年（15回）より昭和13年（17回）まで「マスゲーム」^{マ?}が行われた。最初の年は指導者として，札幌市立高等女学校の教師・伊藤清を迎え，練習した。これには一，二，三部の他，青年学校男女，事務，坑外女子，主婦会等，6～7チームの参加があった。内容は，レコードによるオリンピック体操，興産体操，ラジオ体操や愛国行進曲ダンス，タンブリング，剣舞等であった。「この種の体育をさかんにして，身体の鍛練を図り，あわせて規律的訓練に資したい」¹⁴⁾と，その意図が語られている。これは審査員により，点数・順位はつけられるが，対抗競技には加算されない。

表・2 昭和3(1928)年から昭和18(1943)年までの主な年度における種目等一覧

年代	選手競技			一般競技
	トラック競技	フィールド競技	女子競技	
昭和3年 (1928) 7回	(一部選手競技) 100m 200m 400m 800m 1500m 1000m 継走 (二部選手競技) 100m 200m 800m 800m 継走	走巾跳 走高跳	なし	記事なし
昭和8年 (1933) 12回	100m 200m 400m 800m 1500m 5000m 400m 継走 800m 継走 1600m 継走	円盤投 砲丸投 走巾跳 走高跳 三段跳 槍投	100m 砲丸投 走巾跳 400m 継走	鯉釣，他の記事なし
昭和11年 (1936) 15回	100m 200m 400m 800m 1500m 5000m 高障害 400m 継走 800m 継走 1600m 継走	円盤投 砲丸投 走巾跳 走高跳 三段跳 槍投 棒高跳 (新)	(遷炭機対病院) 100m 砲丸投 走巾跳 400m 継走	ペンギン 大原女 障害物競走 盲猫 堤灯競走 幌引競走 依 運び 車輪支え 百足競走等
昭和14年 (1939) 18回	産業報国共愛組大運動会 100m 400m 1500m 10000m 1000m 継走	砲丸投 走高跳 走巾跳 依運び 綱引き	50m 100m ボール投 200m 継走	クリーク跳び 樽廻し 馬跳び 車輪支え 親子競走 トルコ帽 競走 非常時競走等
昭和15年 (1940) 19回	選手競技を分離，別の日に6部対抗。 100m 200m 400m 1500m 5000m 200m 継走 400m 継走 800m 継走 1000m 継走 スエー デン継走 マラソン 依担い競走	砲丸投 円盤投 槍投 棒高跳 走高跳 走巾跳 三段跳 綱引 車輪支え 国防競走(障害物 手榴 弾，土震運搬 行軍等)	50m 100m ボール投 200m 継走	*町内対抗 50m 100m 200m 400m 1500m 綱 引 車輪支え 盲猫 2人3脚 復命競走 武装競走 国防競走 宝拾い等。町対抗各種リレー等
昭和18年 (1943) 22回	7支部別対抗。17年より一般、選手合併 100m 400m 1500m 綱引 依担ぎ継走 青年継走 部隊別継走 百足競走 団体マラソン 支部継走	錬成会となった 走巾跳 走高跳 手榴弾投 手榴弾突撃	100m スプーンレース	*町内会对抗 100m 200m 800m 武装，暗算競走 車輪支え 防 火継走 婦人会 隣組長 少国 民 女子青年隊等継走

3) 予算，応援団その他の状況について

親和会そのものの運営に，「三井本店」から補助があった事について，前に触れたが，運動会運営費，主として賞品補助があった。会の予算や決算について，「すな川」に記載されているものによれば，昭和4年の運動会予算は総計千円，会費より800円，会社補助，200円である¹⁵⁾。昭和12年下期の親和会予算には650円計上され¹⁵⁾，運動会開催記事には，1650円の費用とある¹⁶⁾。会の一ヵ月分の会費収入は約1,500円である¹⁶⁾。昭和11年の規則改正で，会費は，男子会員，30銭，女子，15銭で，会社は会費と同額を補助することになった¹⁷⁾（これは終戦迄変わらない）。昭和12年には，応援団の補助として各部127円を配布している¹⁶⁾。昭和の始めの相場では，課長の月給が百円，米2俵で10円，昭和10年頃，酒1升1円位¹⁸⁾であった。

この補助金により，応援団の仮装，演技は，運動会を華やかに彩った。たとえば，「紫地に白く二の字を染め抜き，南無妙法蓮華経の旗を立て，団長は加藤清正に扮し……応援団歌勇ましく必勝を期する意気すさまじく正に天を突く……優勝の二字を入れたる大額を応援席に掲げ，熊谷

直実に扮したる団長は、打ち振る日の丸の軍扇と共に踊り出す¹⁹⁾という具合であり、「熱と力、団結と意気、と大書したのぼりを掲げ、十余段の雛段にズラリと並んだ七十余名……リーダーの手拍子足拍子にあわせ、拍手と声援、掌もはれよ、声もかれよの熱演ぶり……整然たる統制と団結力は選手競技一般競技の双方に優勝せしめた²⁰⁾」というものである。この応援団は、時の状況によって変化しつつ継続された。

運動会実施の場所は、最初、住宅建設の為に地ならしをした広場であったが、小学校のグラウンド等でも行われた。昭和7年、鉱業所によって上砂川駅裏に若生ヶ原グラウンドが建設された。また、昭和13年、更に新設、名は同じく若生ヶ原総合運動場とつけられ、そこで運動会は実施された。

3. 戦時期、昭和13(1928)年・第十七回より昭和18(1943)年・第二二回まで

昭和12年、わが国は中国を相手の戦争をしていた。昭和13年からの運動会には、それが反映している。「非常時局下の運動会」、「場内は質実剛健の一角、競技はあくまで砂川魂²⁰⁾」と、戦時体制下が強調され、昭和13年には、新設の一周三百米、若生ヶ原グラウンド開きとして行われた。昭和14年、親和会が、産業報国共愛組合と改名したことにより、運動会は、産業報国共愛組合陸上大運動会となり²¹⁾、同17年には産業報国会運動会²²⁾、18年には、「堅忍不拔の精神と、団結と統制の錬成」とをかかげ、産業報国陸上大運動錬成会と称した²³⁾。

1) 運動会の大要

運動会は、応援団、ブラスバンドを先頭に選手入場、宮城遙拝、国旗掲揚、国歌斉唱と続き、出征兵士の武運長久と戦没英霊の冥福、傷病兵士の快癒を祈願する黙禱を捧げ、次いで優勝旗、優勝杯返還、会長挨拶に選手宣誓と続き、競技開始となった。

この時期は、選手競技を減らした。昭和15年には、時局にふさわしく、国民の体位向上に資するため、町内会対抗により一般種目のみによって行われた。選手競技を分離し、各部対抗により、7月に開催された。しかし、17年再び統合、内容を変更して実施した。また、一方では、各坑毎の小規模の運動会が行われていた。当時の戦争と石炭増産の状況のもと、学徒動員、外国人労働者の動員が増えていたことから、運動会の種目にも影響が見られた。

2) 種目等について

この時期の種目は、表2に示したように、選手競技、陸上競技種目は減少し、戦時、非常時を意識した種目が増えている。表2では、昭和13年のプログラムを省略しているが、選手競技は、百、四百、千五百米に一万米、リレーは千米のみ、トラック種目は砲丸投、走高跳、走巾跳、俵担ぎである²²⁾。これについて久留会長が、「選手競技が少ない、来年からもっと多くしたい²⁴⁾」、リレーをふやすことと運動会雑感で述べている。

この昭和13年、田島直人、橋川雄三、青地球磨男ら陸上競技部選手が入隊のため不在であった。それにもかかわらず「予想外の熱戦も見られ、新進選手の萌芽に大きな期待を持ち得た²⁵⁾」と留守の人々の活躍が記されている。

一般競技にも選手競技にも戦技の種目が増加した。選手競技を分離して開催した年には、陸上競技種目はマラソンやスウェーデンリレー等を含め多様となったが、国防競技として、障害物、手榴弾投げ、土嚢運搬、行軍等が導入された。上砂川を五町に分けて行われた町内対抗一般種目には防火継走、婦人会継走、隣組長継走、少国民継走等があった。走運動、綱引、車輪支えなどの他、復命競争、武装競争、国防競争、防火リレー等が行われ、戦中には、リレー競争²³⁾が主であった。

3) 予算、応援団その他の状況について

昭和13年の運動会予算は、総務部費、半期約5,000円のうち800円である。特別の会社補助について明記はない²⁶⁾。特別費として、「支那事変」に関する支出が報告されている²⁶⁾。

応援団の仮装、演技は、「あくまで統制、質実剛健を押し出し、時局柄、華美な応援は絶対廃止」²¹⁾とされた。マスケームは6チーム参加であった。主婦会のグランドいっばいに広げられた「総動員体操」、国粹の剣舞、軽快な胡蝶等々、「昨年より一段と進歩し、襟を正さしめ、日本魂を強く奮いおこさしめた」²⁷⁾と評された。

この運動会には、汽車に乗って他地方から観客が訪れ、また来賓も招待されている。昭和13年にも各社の新聞記者、関係者が招待され、各々の観戦記が掲載された。「集団運動の殿堂として建てられたこのグランドが益々活用されることを期待すると同時に、全鉱の勤労者諸君がこのグランドで、体育的保健的福恩を満喫されることだろう」北海タイムス中川雄三²⁸⁾、「和気満場に満つる運動会、統制秩序ある運動会、特に全山上下、老若男女一般協力的美風は模範的である」小樽新聞仁科専三²⁸⁾、「非常時局の銃後を守る力強さがうかがえる」札幌陸協錦戸善一郎²⁸⁾とか、さすがはスポーツ王国、健全なる体育向上即産業報国の三井などと感嘆の声が紙面に載せられた²⁸⁾。

4. 戦後前期、昭和21(1946)年・第二三回より昭和33(1958)年・第三五回まで

昭和20(1945)年、戦争は、日本の敗戦で終わった。翌昭和21年、23回目の大運動会が、「新生日本の息吹きを浴びて復活、六千五百の従業者と一万四千の家族とによるスポーツ砂川の大豪華版が繰り広げられることになった」³¹⁾と呼びかけられている。

親和会は終戦の年の暮に労働組合として出発した。このあと、三井砂川鉱業所の大運動会は、会社、労働組合、職員組合及び各坑課職場代表者会議によって、企画・運営されていった³²⁾。昭和33年まで、賑やかに華やかに継続開催された。

昭和32年には、上砂川のオリンピック、「砂川鉱業所体育祭」³³⁾と称し、9月の水泳にはじまり排球、大運動会、野球、卓球、剣道柔道、3月のスキーまで、種々のスポーツ競技を組みあわせて行われた。運動会は新しいグランド(若葉台グランド・1周3百米)の完成を待って、秋・9月7日に行われた。しかし、この試みは一年で終わっている。

1) 運動会の概要について

戦後第一回の運動会は、「厳粛に国歌を合唱したのち、大会長立って、勝敗に拘泥せず、明朗に愉快に正々堂々と競技を行われたいと式辞を述べ、田島直人審判部長から競技上における注意があり、選手宣誓」³⁴⁾ののち、百米から競技が始められた。「絶好のスポーツ日和で、自町選手を鼓舞する夫々の装いを凝らした応援団は大会絵巻の一駒を飾って、ほほえましい雰囲気醸し、数千の観衆は会場の周囲を囲んで……資材難の折柄、会場の装飾などに戦前のような絢らんさはないが、往時を偲ぶ盛大さ」³⁴⁾であった。この年は、37種目、74回、つまり同一種目を2度くりかえした。昭和23年には、39種目、143回の予定である³⁵⁾。この年が一番多い。

役員挨拶では、運動会に示した熱と意気を「明日からの増産に一段と励まされたい」³⁴⁾こと、「新日本建設への三千六百万トンを確認せんとする潑刺たる力を発揮」³⁶⁾すること、「スポーツによって培われる精神と体位の向上は、再建途上にある日本にとって有意義なものであると同時に生産増強の原動力」³⁷⁾であるなどと述べられている。

戦後第一回は、7町内対抗(本町、中町、奥沢、東町、うずら町、若葉、文珠)で行われ、翌年から再び9支部、職場対抗(一坑、二坑+六坑、三坑、四坑、五坑+文珠、七坑、鉱務+保安のち東山坑加わる、工作のち開発加わる、事務)となった。

昭和24年、26回から採点方法が変えられた。男女選手競技及び一般競技中の採点競技を加えて得点とし、順位が競われた³⁸⁾。実施要領は、毎年、協議、確認され、例えば、一人一種目、リレーは別に一種目、団体競技出場は無制限、陸上競技部員中特に認められたものは出場できる、女子は家族を含むが学生は除く等々、細かに定められた³⁹⁾。

2) 種目等について

この時期の種目で、紙上に記載されているものを、表3に示した。選手競技は再び大幅に増え、陸上競技の選手権大会のようにトラック、フィールド種目が揃った。25回(昭和23年)の運動会のプログラムが「砂川春秋」の1、2面を占め、選手競技19種目、一般競技20種目、合わせて39種目、143回にわたる全種目の出場者の氏名を載せている³⁵⁾。これは、戦前、戦後を通じて最も詳しいニュースであった。しかし、この年、午後には雨が降り、選手競技を最後まで行ない、一般競技は途中打ち切られた。一般の採点競技は、百米、八百米、鯛釣り、どじょうつかみ、うさぎ跳び、暗算、拝借、瓶釣り、障害物、二人三脚等々であり、年によって変わった。

昭和27年、28回から、百米、採点選手競技の部においてのみ年齢制レースが取入れられた。10代20代等10歳刻みにしたり、5歳刻みにしたりした⁴⁰⁾。

昭和27年、28年と「スポーツ特輯号」が生まれ、詳報された。36種目87回にわたる運動会の開催要領、開会式次第、種目、採点法、運動会アルバムとしてグラビア12葉等々が記載され、「講話条約も発効され、全国民待望の世界オリンピック大会参加も認められ、全世界の各国に伍して陸上に水上に堂々世界制覇の大翼をはばたかんとする」⁴¹⁾意義深い年であると開会挨拶されている。往年の陸上競技選手、青地球磨男(労務課長)が審判長を努め、審判長注意⁴¹⁾をした。

表・3 昭和21(1946)年から昭和51(1976)年までの主な年度における種目等一覧

年代	選手競技			一般競技
	トラック競技	フィールド競技	女子競技	
昭和21年 (1946) 23回	* 7町、対抗 100m(青、壮) 400m 1500m(壮、青) 800m競走 スエーデン競走等	砲丸投 走高跳 走巾跳 綱引	100m 400m競走	玉入れ 百足競走 年齢別競走
昭和23年 (1948) 25回	*9支部選手対抗 100m 200m 400m 800m 1500m 百足競走 5000m 400 競走 1600競走 年代別競走等19種目	砲丸投 円盤投 走高跳 走巾跳 車輪支え 綱引 三段跳 槍投	100m 200m 砲丸投 走巾跳 走高跳 400m競走 玉入れ	100m 200m 1500m 鯛釣り 瓶釣り 運命、拝借、障害物、暗算競走 どじょうつかみ スプーンレー ス パン食い等約20種目
昭和32年 (1957) 33回	100m(年齢別) 200m 400m 800m 1500m 百足競走 5000m マラソン 年代別40 0mリレー 碓りレー-1600m リレー等19種	砲丸投 円盤投 走高跳 走巾跳 車輪支え 綱引 三段跳	詳細不明	詳細 不明
年代	採点競技			一般種目その他
昭和44年 (1969) 1回	* 三井砂川炭鉱大運動会、各町対抗、7町別 二人三脚 幸運の椅子 瓶釣り 綱引 玉入れ 百足競走 四者対抗リレー 年代別リレー			詳細不明 主婦会の踊り(常盤炭鉱節等) 一中学校ブラスバンド
昭和51年 (1976) 8回	* 各町対抗、7町別、採点種目11種目 玉入れ 男女別綱引 百足競走 亭主撲繰法教えます 1500m 男女別年代別リレー 男子車輪支え(48、5k) 女子車輪支え(3k 砂入りビール瓶) 四者対抗リレー等			一般競技13種目 詳細不明 二人三脚 釣っては見たが どうぞ一服 風船リレー 主婦会踊り(日本はればれ節、常盤炭鉱節等)

* 昭和51年後、「砂川春秋」に運動会の記録はみえない

3) 予算、応援団その他の状況について

戦後の「砂川春秋」には、予算関係記事は記載されず、会社補助についても明記はない。いかなる経費によって運動会が行われたのか、この新聞から読み取ることが出来ない。ただ、運動会

の詳細については、会社、労働組合、職員組合三者で協議し、代表者会議で決めているので、費用も三者で受け持ったのであろうと推測はされる。戦後の運動会については、労働組合、職員組合の資料等によって詳細な分析をすべきであるが、今回の調査においては、資料を見つけることができなかった。

応援団は戦後第一回から、旗を振り歌をうたい、手拍子で選手を励ました。応援団くらべの採点表彰が復活したのは昭和 27 年からであり、この年は、鉱務支部が、「アノネのオッサンの音頭でチャッチャッチャッ」で 1 位であった⁴²⁾。テーマとして、熊まつり、桃太郎、ピエロ、砂川小唄、狸ばやし等々があった。応援については別に採点され、表彰、賞品授与されているが、戦前のように美文で記述されていない。

昭和 33 年の運動会以後十年間中断された。この理由について、紙上には何も述べられていない。

5. 戦後後期、昭和 44 (1969) 年・第一回より昭和 51 (1976) 年・第八回まで

昭和 34 年より十年間の中断を経て、改めて一回目より始められた。この中断の要因について紙上での説明はない。いわゆるエネルギー革命の進行下、総合的なエネルギー政策の見直しと実行のため、政府は石炭鉱業審議会(1955 年)を設置、石炭産業の今後の対策、国内石炭産業の縮小、撤退を含む方向づけを行った。「石炭鉱業の曲り角、労使は考えよ」⁴³⁾、「エネルギー革命下、当所では、危機克服のため、懸命な努力を続けている時だけに行事は努めて自粛」⁴³⁾、三年振りに祭りのミコシが出されたと記述されている。

この中断の間に各町内毎に規模は小さいが、鉱業所の大運動会と似たような内容のものが実施されていた⁴⁴⁾。昭和 39 (1974) 年には、第一回上砂川レクリエーション大会が三千人参加、町内 10 チームの参加により 17 種目、主婦会の「東京五輪音頭」等もあり、家族ぐるみで行われた⁴⁵⁾。

昭和 44 (1969) 年 7 月、「諸事情のため見合わせておりました鉱業所大運動会が十年ぶりで開催される」⁴⁶⁾と予告され、「青空のもと熱戦に湧く、十年振りの大運動会、四千人の観衆で賑う…この団結力、盛り上がり、明日への仕事にぶつけ、さらに明るい砂川炭鉱を築きましょう」⁴⁷⁾と結果が報告されている。

この方向で昭和 51 年まで、八回継続された。回を重ねる毎に参加者の数は増えていると記されている。昭和 50 年は中止されているが回数には含まれている。昭和 51 年、八回を最後に「砂川春秋」紙上に、大運動会の記事は登場しない。町内毎の運動会、レクリエーション大会、体育祭、スポーツ種目別競技会、学校、保育園等の運動会等は折々に開催され、関係記事が掲載されている。欠号もある(昭和 56 年度分、欠号)ので、断定は出来ないが、砂川鉱業所としての大運動会は行われなくなったのではなからうか。

1) 運動会の概要

再開第一回は、各町対抗(本町、中町、奥沢、東町、鶉、下鶉、朝駒の 7 チーム)により行われた。会場は上砂川一中グラウンドであり、再開四回目、昭和 47 年から、若葉台グラウンドで行われた。開会式要領は、中断前と殆ど同じである⁴⁷⁾。会社、労働組合、職員組合の幹部、町長等の来賓を前に、ボーイスカウトが社旗を持っての先導により選手が入場し、上砂川第一中学校(昭和 47 年より上砂川中学校)ブラスバンドによる演奏、主婦会の踊り等、写真には整然としてスマートな様子が表現されている⁴⁸⁾。

2) 種目等について

運動会種目はやはり、一般競技と採点競技に分けられていた。「砂川春秋」にプログラムの詳

細は記載されていない。この時期の種目は、表3に示したように、選手競技また陸上競技種目は減少し、一般競技が主である。陸上競技の走種目は1500米のみである。採点競技は、いわゆる運動会種目たとえば二人三脚や綱引、玉入れ、百足競争、瓶釣り、幸運の椅子等に、順位をつけ得点化している⁴⁵⁾。四者対抗リレー（会社、労働組合、職員組合、関連会社）、男女別の年代リレー（年代毎に、男子は14人一チーム、女子は13人一チームによる）、応援合戦等に人気があった⁴⁷⁾。ここで運動会は、内容や雰囲気が変わり、いわば娯楽的な気軽な運動会となったことが読みとれる。

3) 予算、応援団その他の状況について

前項で述べたように予算に関する記事は「砂川春秋」に掲載されておらず、他の組織の資料を見ることはできなかった。状況は不明である。アトラクションとして、主婦会が揃いのゆかたで踊る常磐炭鉱節、上砂川中学校のブラスバンド演奏、「恋の季節」や「ブルーライトヨコハマ」等があった⁴⁸⁾。

応援団くらは、再開第一回目には、一位はフラダンス（奥沢）であり、駒踊り（鶉）、インディアン（下鶉）、ピエロ（朝駒）、消防（本町）、ピンクとキラーズ（中町）、花咲かじいさん（東町）等⁴⁸⁾であり、昭和47年は大漁唄いこみ、東町モニター坑、赤穂浪士⁴⁹⁾、昭和51年は、婦人消防団結成、火星探検機砂川第一号⁵⁰⁾などがアイデア賞を競った。

この頃の上砂川の人口は一万人余、グラビア写真に映る観衆は、以前に比べ少ない。

V まとめにかえて

北海道空知郡上砂川町にあった三井砂川鉱業所で大正11（1922）年より続けられた運動会を、五期に分けて考察した。それは次のように要約できる。

1. 初期は大正11（1922）年、1回より昭和2（1927）年の6回まで。いわゆる運動会種目による一般競技と職場対抗（当初は一坑対二坑のみ）による選手競技とで始められたが、紛争により一旦中止された。スポーツが職場毎の対抗意識にまでエスカレートし、ひいては、勤務状況や勤労意欲にも結びつき生産への疎外条件になったのである。この時期、娯楽としての運動会職場対抗と労働生活について、意識の切りかえ、分化がなされず、一体化していた。
2. 中心期は昭和3（1928）年、7回より昭和12（1937）年、16回まで。7回から職場対抗の選手競技が復活した。親和会機関紙『すな川』が創刊され、運動会について詳報し、ヤマ全体にその雰囲気を盛りあげた。昭和11（1936）年、修養部内の運動部であったのが、体育部として独立し、陸上競技部は対外競技に活躍し、所内の運動会には出場せず、係活動や指導を行った。
3. 戦時期は昭和13（1938）年、17回から戦争中の昭和18（1943）年、22回まで。戦技的種目がつくり出された。昭和14（1939）年、親和会は産業報国共愛組合（15年、共愛会）、昭和17年、産業報国会と改組され、運動会の名称、内容が変わった。坑夫、職員も選手も兵隊として多数出征し、戦死者も出る状況のなかで、「すな川」には戦場だよりが一ページ設けられた。増産の記事や炭鉱事故、死傷事故の記事も増加した。教練査閲、紅白白兵戦、大日本青年体操等の団体訓練が主となり、運動会は19、20年と中止された。この中で陸上競技部等スポーツ活動は細々と続けられていた。
4. 戦後前期は、日本の復興期であり、石炭増産も戦中とは異なった重要性を持っていた。昭和21年、23回陸上大運動会として陸上競技種目中心で行われた。開会式には、田島直人が審判長注意を行うなど、選手競技の部は、陸上競技選手権大会のごとくであった。昭和21年は町内対

抗、翌年から再び支部（職場）対抗となり、賑やかに華やかに12年間継続開催された。運営等については、会社、労働組合、職員組合三者及び各坑課職場代表で協議された。戦後もつづけて（昭和21年、数年中断して27年から再び）開会式は所長挨拶で始まり、「君が代」が歌われている。この会社の「大家族主義、労使協調主義」が示されている。

5. 戦後後期は十年の中断のあと、昭和44年から、内容を変え、第一回として再復活した。最終は何年であったか確定できない。「砂川春秋」紙上に、昭和51年、第8回開催記事の後、大運動会記事を見ることはできなかった。（欠号もあるので断定はできない）。

運動会は、町内別のもの、坑口別のものと、夫々分散して開催されたし、上砂川町としてのレクリエーション大会とか体育祭、各種スポーツ大会とかいうものもあった。小学校や保育園の運動会に大勢の父母が集り、楽しんでいる様子も載っている。三井砂川炭鉱、一体となつての大きな運動会をすることができなくなった。つまり、人々の意識も変化し、興味も行動も分散化していったのであろう。

上砂川における、三井砂川鉱業所の運動会は、大衆的な運動活動であり、スポーツの入口となる行事であった。鉱業所の年間行事のうちで最も大きな行事として、会社側も力を入れ公休日に開いている。運動会によって労働者がリフレッシュし、勤労意欲が高まる結果になることを会社側は期待したのであろう。逆にプレーキになった面もあり、運動会の翌日は、出勤率が低いので高めるよう、出勤率を示したり、家庭で協力せよと呼び掛けがなされたりした。

この運動会で、注目されるのは、その度ごとに各支部、各職場につくられた応援団である。毎年、各チームは応援団に意匠をこらし、贅をつくして、チームの勝利を声高に叫び競いあった。所属する部、坑口、町内を応援することそのことで、選手も家族も観衆も一体となり、心理的な結合が強められ、三井砂川の一員であることを実感するのである。華やかな応援合戦に参加することによって、三井砂川鉱業所つまり会社への帰属意識が育てられたのであった。

この大運動会の開催のされ方、名前のつけ方に、上砂川炭鉱の盛衰、ひいては国の石炭政策の反映がみられた。日本が挙げて太平洋戦争に踏みこんでいた時は、国策、戦況の動向の影響があり、大きな変化が見られた。

三井砂川鉱業所では、第二次大戦前から、スポーツがさかんに行われていた。周知のように昭和11（1936）年に採用された田島直人は、ベルリンオリンピックにおいて三段跳びに優勝した。陸上競技関係では、橋川雄三（走高跳）や青地球磨男（中距離）らが採用され陸上競技会で活躍した。

これまでの調査によって、この炭鉱における多彩で大衆的な、一方で高度な面もあるスポーツ的活動の存在は、炭鉱労働者がスポーツに親しみ、生活にスポーツの楽しみを見出す環境を作り、また炭鉱員のみならず、上砂川の町民全体がスポーツに親しむうえで一役買ったものといえる。三井砂川鉱業所の運動会は、ふるさとの、「ヤマ」そのものの表現であり、上砂川のシンボルとして人々の意識に位置づけられた。

企業内のスポーツ活動のあり方が、上砂川町民全体がスポーツに親しむ土壌を形成するうえに影響を及ぼした。上砂川は一町一企業であり特殊な条件下にあったが、第二次大戦後の昭和21年に、いち早く上砂川スポーツ連盟が結成されて活動したことがそのことを示している。この上砂川スポーツ連盟についての探究も課題である。今後、更に広く資料にあたり、三井砂川鉱業所のスポーツ的活動全般について明らかにしたい。この会社にあった運動部の存在と活動、すなわち陸上競技部、野球部、スキー部、庭球部、柔道部、剣道部、弓道部さらに自転車部等多くのクラブが、所内での職場別対抗試合を組織し、日常的に練習し、対外試合に出場する等多彩な活動を行った点、かつて北海道の中心産業であった石炭企業が、スポーツの展開、発展について、いかなる役割を果た

したのか興味のある問題である。

おわりに、資料閲覧等について、種々お世話いただきました、上砂川町、鎌田豪助役を始め、役場の皆様に厚くお礼を申し上げます。

註及び参考文献

- 1) 三井砂川鋳業所親和会機関紙名の変化, すな川・1~91号(1928, 6~1934, 8). すな川新聞・1~403号(1934, 8~1945, 12). 砂川春秋・404~1199号(1946, 1~1987, 7).
- 2) 日本体育協会, スポーツ八十年史, 東京(1960), p 94-98.
- 3) 上砂川町, 上砂川町史, 1959.
- 4) 上砂川町, 新上砂川町史, 1988.
- 5) 親和会の回顧, すな川, 7(1929, 1, 30).
- 6) 片山敬次, 三井砂川陸上競技史, 三井鋳山事務所, 本間印刷, 札幌(1950), p 8.
- 7) 三井砂川鋳業所親和会, すな川, 2(1928, 7, 25).
- 8) 吉村武彦, すな川新聞, 30(1935, 7, 25), 付録 p 1.
- 9) 中山誠寿, 訓示の概要, すな川, 69(1934, 6, 30), p 5.
- 10) 久留貞次郎, すな川, 30(1935, 7, 25), 付録 p 1.
- 11) 久留貞次郎, 1935年に三井砂川鋳業所次長として赴任, 次長が親和会会長となるきまりであった。昭和11年, 田島直人や橋川雄三, 翌年, 青地球磨男ら, 本社採用のスポーツ選手を赴任させた。久留杯マラソン創設やグラウンド新設等スポーツに力を入れた。自らも登山, スキーとスポーツをよくした。昭和12年の運動会後上京し, 急逝した。
- 12) 久留貞次郎, すな川, 65(1936, 6, 21), 付録 p 1.
- 13) 車輪の重量の記載はない。砂川春秋 1052号(1974, 10, 1. p 3)に, 48.5キロとある。
- 14) 高畑由造, すな川, 100(1937, 6, 11), p 6.
- 15) 5月代議員会の議事, 「第八回運動会予算承認の件」, すな川, 12(1929, 6, 30), p 2. 親和会予算, 800円, 会社補助, 200円, 総計千円。支出内訳(設備費180, 賞品代250, 接待費250, 番組印刷代100, その他220円)。
- 16) 三井砂川鋳業所親和会, すな川新聞, 99(1937, 6, 1), p 3.
- 17) 同上, 60(1936, 5, 1), p 3.
- 18) 岩崎爾郎, 物価の世相100年, 1982, 読売新聞社, p 301.
- 19) 三井砂川鋳業所親和会, すな川, 2(1928, 7, 25), p 4.
- 20) 三井砂川鋳業所親和会, すな川新聞, 65(1936, 6, 21), 付録 p 2.
- 21) 同上, 136(1938, 6, 11), p 3.
- 22) 同上, 172(1939, 6, 11), p 3.
- 23) 同上, 283(1942, 7, 11), p 4.
- 24) 同上, 318(1943, 7, 1), p 2.
- 25) 同上, 136(1938, 6, 11), p 3. 運動会雑感(久留生)。「内容に新味が乏しい。新グラウンドでの準備は完全である。統制がとれている。応援の熱演ぶりには感心した。女子競技をもっと盛んにしたい……リレー競争の事」。
- 26) 同上, 136(1938, 6, 11), p 7.
- 27) 同上, 136(1938, 6, 11), p 9.
- 28) 同上, 136(1938, 6, 11), p 4.
- 29) 同上, 136(1938, 6, 11), p 6.
- 30) 同上, 136(1938, 6, 11), p 1.
- 31) 上砂川鋳業所砂川春秋編集部, 砂川春秋, 410(1946, 6, 11), p 2.

- 32) 第二次大戦後は、三者共催の形であるので、労働組合と職員組合の資料を加えるべきであるが入手できなかった。
- 33) 上砂川鉱業所砂川春秋編集部, 砂川春秋, 703 (1957, 9, 1), p 1.
- 34) 同上, 410 (1946, 7, 1), p 1-4. なお, 昭和 23 年の式順は, 入場, 修礼, 開会宣言優勝旗返還, 総裁式辞, 審判長注意, 選手宣誓, 競技開始であり, 昭和 27 年は, 入場, 修礼, 開会式辞, 国旗掲揚, 国歌斉唱, 優勝旗返還, 会長式辞, 審判長注意, 競技開始である。
- 35) 同上, 473 (1948, 6, 15), p 1-2.
- 36) 同上, 475 (1948, 7, 15), p 1.
- 37) 同上, 636 (1954, 10, 1), p 2.
- 38) 同上, 499 (1959, 7, 15), p 1.
- 39) 同上, 546 (1951, 6, 1), p 2.
- 40) 同上, 578 (1952, 6, 21), p 1.
- 41) 同上, 579 (1952, 7, 1), p 1.
- 42) 同上, 421 (1946, 7, 1), p 3.
- 43) 同上, 806 (1962, 5, 15), p 3.
- 44) 同上, 748 (1959, 7, 15), p 1. 三井奈井江第一回町民運動会, 東町町民運動会, 鶉町町民運動会. 749 (1959, 8, 1), p 3. 奥沢町親和会・主婦会主催家族慰安運動会, 第八回本町家族慰安運動会, 下鶉町進栄会・主婦会主催運動会, 文珠町第八回町民運動会, 第三回空知体育祭等々。
- 45) 同上, 837 (1962, 9, 15), p 2.
- 46) 同上, 952 (1969, 7, 1), p 2.
- 47) 同上, 953 (1969, 7, 15), p 2.
- 48) 同上, 953 (1969, 7, 15), p 3.
- 49) 同上, 1024 (1972, 8, 1), p 2.
- 50) 同上, 1070 (1976, 10, 1), p 3.
- 51) 木村誠一, 上砂川市井史, 上砂川郷土史研究会, 1957.
- 52) 片山敬次, 古老は語る, 上砂川郷土研究会, 1956.

以上